

相貌から読み取られる性格の情報

(I) 外向性と攻撃性に関するコルマン説の検証

益谷 真

(敬和学園大学人文学部)

Key words: *implicit theory, face recognition, L. Corman's hypothesis*

目的

相貌は身心特性のミニチュアであると考え、詳細な質的分析をしたルイ・コルマンの主張(1985/2005)の中から、本研究では、顔の輪郭(外枠)と受容器のパタン(内枠)を採り上げ、顔立ちから他者がどの程度、性格を読み取るかを評定データによって検証する。

コルマンによれば、顔の外枠は生体の生命力を示し、膨張—縮小の類型があり、顔の内枠は生体の環境との交渉様式を示し、開いた—閉じた受容器群の類型がある。これらの類型に肉付きや局所性がバリエーションを加え、さらに緊張性、均衡性、統合性、可動性によって顔立ちの複雑さが構成されるとされる。

本研究では、相貌と性格を結びつける暗黙の性格理論を人は持っているとする素朴心理の観点から、顔から読み取られる性格の情報として、コルマンの類型の中でも比較的明瞭に記述されている外向性と攻撃性に焦点を当て、自己評定の高群と低群の中からコルマンの説にそって顔の標本を選定し、他者がそれらの特徴を備えた顔から、外向性と攻撃性をどの程度読み取るかを検討した。

方法

分析対象 教養課程の心理学を受講する358名の大学生が自身の性格を評定した。その中から外向性が高く且つ攻撃性の低い14名(男女同数)と、外向性が低く且つ攻撃性の高い14名(男女同数)をコルマンの説にそって顔写真から標本を選定した。なお、標本も評定者と同じ集団であったので、顔写真から似顔絵を作成して呈示した。

性格の評定尺度は、外向性(Snyder, 1974)が6項目で $\alpha = .69$ 、攻撃性(Buss & Durkee, 1957)は身体的9項目と言語的12項目の合計で $\alpha = .72$ であった。いずれも平均値から1SDの範囲で高群と低群に分け、それらの中から以下の特徴に合致する顔を標本として選定した。

1. 外向性が高く攻撃性の低い顔：顔の大枠が膨張型で、丸形・広い楕円形・角の丸い四角形の大きく湾曲した輪郭で、緩やかな丸い肉付き。目・鼻・口の肉付きがよく、外に向かって広がった配置。

2. 外向性が低く攻撃性の高い顔：側面や前面が(防衛の為に内側に向かって)狭く細身。目・鼻・口の肉付きは起伏があり閉鎖的で目鼻立ちが明瞭。

これらの標本抽出の操作的妥当性をみるために、顔写真を拡大し、両瞳の中心間の距離、瞳と鼻の端点との距離、鼻の端点と唇の中心との距離を実測し、各比率を算出した。

標本に対する評定 標本は授業中に大教室でプロジェクターを用いて呈示した。評定者には以下の形容詞対を6件法で評定させた。外向性は①親しみやすい—親しみにくい、②社交的な—非社交的な、③素直な—強情な、の3項目で、攻撃性は①攻撃的な—防衛的な、②衝動的な—用心深い、強気な—弱気な、の3項目で、いずれも合計を評定値とした。

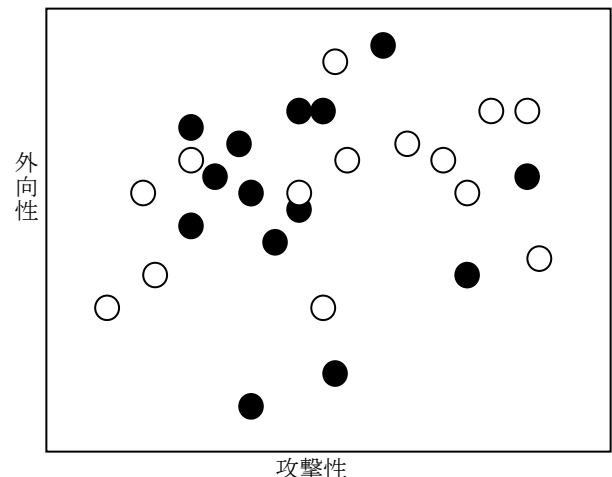
結果

標本抽出の操作的妥当性 標本の2群間で目鼻立ちの距離(比率)に関してのみ有意差が認められ(瞳間/瞳鼻間

$t(26)=2.43, p<.05$, 瞳鼻間/鼻唇間 $t(26)=1.20, n.s.$, 瞳間/鼻唇間 $t(26)=.23, n.s.$)、似顔絵でも目・鼻・口の間隔は維持されていることも併せて、コルマンの類型を部分的に確保した標本であることが確認された。

評定者による標本に対する評価 標本(14名×2群)と評定者340名(欠損値のない有効評定)の相互作用を考慮して、標本の抽出条件と同様に、自己評定の全体平均値から1SDの範囲で、男女同数にして無作為に高群・低群から各50名ずつ抽出した。計100名の評定者による標本に対する評定結果は、外向性が高く攻撃性の低い標本群に対しては外向性が有意に高く($t(99)=2.68, p<.01, r=.88$)、他方、攻撃性は有意に低く($t(99)=3.98, p<.001, r=.94$)評価された。このことから、コルマンの類型は評定データの上で、他者が顔から暗黙理に性格を読み取る際に有効であることが支持された。

標本に対する評定平均値の散布 標本群の統計的な差違は総量的なものであるため、他の構成要素がどの程度影響しているかを見るために、標本個々の評定平均値を散布図にして検討した。



考察

顔の種類の違いによる性格情報の読み取りが、標本全体に関しては統計的に有意であっても、個々の標本をみていけば評定には外向性と攻撃性が交絡していることがうかがえる。散布図では外向性が高く攻撃性が低い標本を黒丸(白丸はその逆)で示したが、外向性と攻撃性が明確に分離しているわけではなく、性格の情報は明確に弁別されていない。生体の表出形態には相反原理が働くと考えられているが、顔の形態から読み取られる情報には、外向性と攻撃性の背反律が認められないことが示唆される。顔立ちのリアリティを保持しながら、形態と認知評価の関係をさらに検証していくことが必要である。

文献

L.コルマン 須賀哲夫・福田忠郎(訳) 2005 相貌心理学序説—顔立ちと性格 北大路書房

(MASUTANI Makoto)